

当初の学年暦にしたがうと、4月7日から始まった春学期の通常授業日は、7月15日で最後を迎えることになっています。変則的な授業期間ですが、6月を迎え、すでに折り返し地点を過ぎました。授業では、ひとりで熱心に学修されている多くの皆さんの姿に驚き、励まされています。

それぞれのひとりひとは、どのような日常を送っておられるのでしょうか。全員が、それぞれ違った環境で、違う考えを持ちながらも、同じ課題を共有し、同じ対象に向き合います。そして時々、一緒にキャンパスにいたはずの、まだあったことのない仲間のことを思い浮かべるのではないのでしょうか。早く会いたい人、不安が大きい人、それぞれに様々な感じ方をしておられるようです。

最近時々、「気配を消す」という言い方を時々耳にします。言い得ていますね。とても分かりやすい表現です。ひとと一緒にいるなかで、気配を消して透明になってしまいたいのは、何のためでしょうか。

何十年前ですが、D.リースマンというアメリカの社会学が、『孤独な群衆』という著作のなかで、他者を基準とし、他者の目線で自分を規定するとき、人は不安になり、孤独に陥るということを指摘しています。大勢で賑やかに過ごしていても、誰ともつながらないような孤独を感じる、というのです。ここで言う「他者の目線」とは、客観的な目というよりも、他者が備えた基準に自分が適うのか、自分は合格するのか？という感覚をもたらすものです。合格をもらうために、いろんなことを身に付けなければなりません。合格しても、つぎの条件が待っています。その連続は、息苦しく、不安をかきたてますー。

いま、わたしたちは一緒にいなくても、SNSなどを用いて、ひとといろんなつながり方をすることができます。逆に、そのつながりが、自分を制限するの鎖のように思えてしまうことはないでしょうか。そんなとき、そのつながりの外に出て、自分の気配を消し、傍観者でいたい、という思いが湧いてくるのかもしれませんが。それでも、そのつながりを、まるで命綱のように感じてしまうこともあるようです。

わたしたちは人とのつながりによって支えられ、力を与えられます。ですから、そのようなつながりであれば、命綱と思えても不思議ではありません。そこには何があるのでしょうか。自分のことを心配してくれる、自分のことを喜んでくれる、そして、自分と一緒にいたいと思ってくれる、そんな気持ちが自分に向けられていることに気付くのではないのでしょうか。その人に都合の悪いことを自分がしてしまったとしても、そのつながりは変わらず、むしろ、どんな風につながっていたのかを確認することにさえなるようなつながり。

温かく、どっしりと安定した、安心をくれるつながり。そこでは、自分の気配を全開にして、自分を差し出したく思えます。

皆さんご自身はいかがでしょう。他者に対してでなく、自分自身に対してです。自分自身とどのようにつながっていますか。慣れない状況のなかで毎日励んでいる自分自身をねぎらっていますか。自分自身を喜んでいますか。「わたし」として、今日もこうして当たり前の一日を無事に過ごしていただけることを、一緒に喜んでいますか。

わたしたちは、むしろ、時々、頑張っている自分を責めたり、追い詰めたりする側に立ってしまっていることがあるかもしれません。けれども、だからこそ、そんなわたしたちとつながってくれている存在があります。イスラエルの王ダビデは、そのような存在がともにいてくださることで自分は十分に与えられているのであり、どんな状況のなかでも恐れる必要がないのだと告白しています。神の存在が、王としての重責と孤独、そして自身の弱さを自覚しながらも日々重ねる、ダビデの歩みを支えていたということです。

ひとりでの学修には、日々、様々な難しさが伴っていることでしょう。それでも学び続けておられる皆さんは、確かに大きな力に守られて、支えられているのだと思います。今日も、そのような力に信頼しつつ、一緒に、新たな一歩を歩みましょう。

(教育学部宗教主事 梶原直美)

聖書のことば：詩編 23 編 1-2 節

「主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ 憩いの水のほとりに伴ひ 魂を生き返らせてくださる。」

